
女子高生コンクリート詰め殺人事件（禁戒の書）

藪 冬彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子高生コンクリート詰め殺人事件（禁戒の書）

【NZコード】

N8397V

【作者名】

藪 冬彦

【あらすじ】

平成元年3月30日

午後、発見されたドラム缶の中のコンクリートを警察署内で解体。中にはボストンバッグに詰められ、掛け布団2枚にくるまれた女性の死体が入っていた。DNAの鑑定から行方不明だった地元の女子高生であった。浅田捜査課長は、巡回検査に元オリンピック射撃競技代表選手であった片桐榛名警部補を抜擢したが・・・。

プロローグ

平成元年3月30日

午後、発見されたドラム缶の中のコンクリートを警察署内で解体。中にはボストンバックに詰められ、掛け布団2枚にくるまれた女性の死体が入っていた。

死後2ヶ月以上経過、腐敗が進行しており状態は悪かつた。

皮下脂肪の厚さは通常の6割程度で栄養失調状態。

全身に殴打による浮腫（リンパ液が多量にたまり腫れ上がった状態）があり、死因は外傷性ショックまたは胃の内容物を吐いたことによる窒息死とされた。

顔面が陥没・変形していたため、外見からの確認は困難だったが、指紋や歯などの照合から、11月25日夜アルバイト先からの帰宅途中で行方不明になつた埼玉県三郷市高州1丁目の県立八潮南高校3年生の少女（17）であることが確認。

八潮市内のアルバイト先に行つたまま帰宅しないと吉川署に捜索願を出していた両親は、無事に帰つてくることを心待ちにし、父親は仕事を休んで行方を探していた。

検分した際、女子高生の死体は腐敗し、すでに親でさえ判別しがたいほどに変わり果てていた。女子高生の母は悲嘆の余り、病に倒れ、現在もなお精神科に通院加療を続いている状況である。

女子高生は、被害当時、卒業を間近にした高校3年生で、すでに就職も内定し、将来への夢をふくらませていたものであるが、本件について、何らの落ち度もなく、たまたまアルバイト先からの帰宅途中、暴行目的の犯人達に拉致された後、41日間監禁され堪え難い数々の暴行、凌辱を受けた。

この事件は、女子高生コンクリート詰め殺人事件として社会に衝撃を与えた。

吉川署に捜査本部が設置され、捜査員50名が動員された。

埼玉県下に類似の事件が頻発しており、連續婦女拉致監禁暴行事件として凶悪事件リストの最上位にランクされた。

県警上層部からあらゆる手段を駆使して、犯人検挙に全力を尽くすように発破がかけられた。

プロローグ（後書き）

この小説は、実際にあつた事件を元に創作した連載ものです。受戒・破戒・禁戒3部作の「禁戒の書」になります。

埼玉県三郷市内において連続拉致暴行事件が発生。

自転車で走行中の女子を狙い車に誘い込み強姦する。

無力な女子に対し暴力で脅し、言いなりにするという卑劣な犯行である。

目撃者の証言によると犯人は複数であり、車で被害者を物色し強引に拉致をする。

あまりの陵辱的な犯行に、被害届けが出ないケースが多いとみられる。

数件は被害女性が病院で手当てを受け病院から通報を受けるという状態である。

実態は恥ずかしさから泣き寝入りをする被害者がほとんどと思われる。

埼玉県警は囮捜査により犯人検挙を日論み、適任者の選考を特務犯捜査課課長浅田浩二に一任した。

浅田課長は、元オリンピック射撃競技代表選手であった片桐棟名を抜擢した。

合気道3段の持ち主であり、頭脳明晰で美貌も兼ね備えた片桐が囮捜査に適任と思った。

深夜の市道を一人歩く無警戒な女性を演じ、毎夜埼玉県三郷市の被害多発地帯を中心に巡回捜査を実施した。

時々脇を通る車が通り過ぎる間際に速度を落とし片桐榛名の様子を窺うこともあつたが単に助平な男が一人乗つただけの冷やかしだつた。

3日田の午後10時 いつものように片桐榛名はミニスカートを穿き露出度の高い姿で中川沿いの国道を一人で歩いていた。

100mの間隔を置き、河川敷からバックアップの捜査員が待機していた。

ハイヒールがアスファルトを叩く甲高い音が、辺りに反響していた。

突然一台の車が現れた。

日産シルビアで車窓は全てスマートガラスになつていて

20キロ程度の速度でゆっくりと片桐榛名に近づいていった。

榛名と並走する形になつた。

榛名は振り向きもせず真っ直ぐ歩いているが、彼女の緊張感が伝わってきた。

助手席のウインドウがスルスルと下がった。

若い男が顔を出した。

「すみません 道に迷ったんですけど IJの辺わかります?」

「・・・」榛名は無視して歩いた。

「ちょっと すみません」と困ったような男の声がさうし続いた。

突然、榛名が立ち止まり車の方向を向いた。

車も停まった。

「ビリへ行きたいの!」怒ったような口調だった。

「IJの地図を見てください」と慌てて男はロードマップを差し出した。

榛名が一歩近づく、そして車の中を覗き込むような恰好になつた。

「全員、臨戦体勢を取れ。車のナンバーが判るか?」と主任の松岡が言つた。

「今、ナンバーを照会しています」

その時、シルビアの後方のドアが開き、男が出て來た。

男は榛名の肩口に向かつて何かを押し付けたようだつた。

榛名は右肩を抑えて蹲つた、男の手にはスタンガンが握られていた。

そして無理やり榛名を後部座席に押し込んだ。

急発進したシルビアは、越谷市方向へ走り去つて行く。

捜査員達は慌てて後を追つたが、すでに遅く車のテールランプが視界から消えていった。

「まずい！奴らの術中に嵌つてしまつたようだ」と松岡が唇を噛んだ。

「あのシルビアの捜索のため緊急手配をかけてくれ」と指示した。

調べたナンバーはやはり盜難車のものだった。

「片桐さんの携帯のGPS追尾を司令室で開始したのです」と部下が言った。

その頃シルビアの車中では、男達3人が榛名の品定めをしていた。

「こいつはいい女だぜ ひやつほー！」

「今夜は寝ないで一晩中やらせていただきまーす

榛名の口にガムテープを貼り、服を脱がせ始めた。

半分意識が飛んでいた榛名は、朦朧とするなかで男から激しく胸を揉まれ、パンティにまで手を突っ込んでくるのが痛みで感じとった。

「おい 止めるんだ！ 佐藤先輩に見せてからだぞ」とハンドルを

握る男が言った。

二人はしづしづ弄ぶのを中止した。

榛名をパンティ一枚の姿にして、両手を後ろ手にし透明の結束バンドで縛った。

ようやく榛名は意識がはつきりとしてきたのか、男達の顔にピントが合つてきたのが判つた。

佐藤という名の男の家に向かうらしい。

（暴行魔たちの巣窟へ潜入できるかもしない）と榛名は期待する。

間もなく越谷市街に入り、とある一軒家の駐車場に車を乗り付けた。

玄関に現れた佐藤は、瘦身の背の高い20代の若者だった。

いたるところにピアスを挿している異様な顔だ。

薬物依存者特有の頭を揺らす仕種をする。

榛名を連れた男達3人を家の中に招きいれた。

部屋に入ると、榛名の口のガムテープを無理やり剥がす。

榛名の顎を人指し指で持ち上げた佐藤は言った。

「若くないがいい女だ この女の所持品を見せろ」

運転していた男が榛名の持っていたバッグを差し出した。

佐藤は中の物をテーブルの上にぶちまけた。

携帯電話や化粧品、財布と一緒に黒い革表紙の定期入れのような物があつた。

財布の中を見てクレジットカードと金を抜く。

そして黒い皮製の物を開いた。

「おい これは警察のIDカードだぞ!」と佐藤が叫んだ。

「貴様達！婦人警官を拉致つたのか」全員を見回した。

「携帯電話を持つてすぐにここから離れるんだ」と運転手の男に携帯を投げた。

慌てたその男は、携帯を握り締め家を出て行った。

「やべー おこどりする」と残つた二人が榛名を見た。

「GPSで追尾しているからこの家の特定も時間の問題」と榛名が言つ。

「生意気な女だ」佐藤は榛名の顔面を殴りつける。

かわす暇もなく裸のまま床に叩きつけられた。

結束バンドが手首に食い込む。

その頃、指令センターでは榛名の携帯電話のGPS機能を捕捉していた。

越谷市の中心部で一時動かなかつたナビの点滅がまた動き出した。

浅田特務課長にセンターから連絡がいき捜査員総出で追跡を再開した。

片桐榛名はクロロホルムを含んだハンカチで鼻と口を塞がれ強引に嗅がされる。

榛名の意識が混濁し、彼女は深い眠りについた。

「これからこの女を別荘に連れて行く、ガレージからすぐ車を出していい」と佐藤は言いながらキーを一人の男達の方へ投げた。

「先輩 すみませんでした」と頭を下げる。

「玄関前に車を回してきます」急いで一人の男は、車を取りにいく。

倒れている榛名を、冷酷な眼で佐藤はしばらく見下ろしていた。

そして、ピアスの付いた舌で唇を舐めた。

指定暴力団

コンクリート詰めで発見された、埼玉県三郷市高州1丁目の県立八潮南高校3年生の少女の告別式がしめやかに執り行われた。

斎場には親類縁者、学校の同級生や近所の住人が300人近く参列していた。

納棺の蓋はついに開けられることはなかつた。

通夜の儀が終わり一般の弔問客が退けた後、斎場の玄関先に黒塗りのベンツが滑り込むように横付けになり停車した。

助手席から降りた男が後部座席のドアをさうと開ける。

中からサングラスをしたダークスーツ姿の一団が降り立つ。

帰り間際の弔問客がいぶかしそうにその一団を見ている。

彼らは気にもとめず斎場内に入り、香典袋を受付に出した。

相手の素性が判つたのか、封を切る受付係りも緊張しているようで手が震えていた。

報せを聞いた喪主の父親が現れた。

「宏茂君 わざわざ来ててくれてありがとう」と声を掛けた。

「おやじさん いたびは何て言つていいか お氣の毒で・・・

とサングラスを外した鈴木宏茂は勞わるよつに父親の顔を見て言った。

「あの子が不憫でならない」と父親の涙は止まる事を知らなによつだつた。

抱きかかえるよつに鈴木は、父親を祭壇の前へ導き並んで席に着いた。

鈴木は指定暴力団住吉会の関係者だつた。

父親の甥にあたる。

殺された娘とは小さい頃から兄妹のよつに育つた。

高校を中退して逸れた道を歩み始めた宏茂は、親から勘当せられていた。

親類の中では、この親子だけが昔と変わらずに接していたのである。

「秋ちゃんをこんな田に遭わせた犯人がまだ捆まつていなつて本当なのかい」と宏茂は頭を振つた。

「宏ちゃん 力を貸してくれないか」と遺影を見つめる父親は呟いた。

「私は秋の復讐をしたい 犯人の奴等を同じ田に呑わせてやりたいんだ」宏茂の目を見た父親は言った。

その真剣な眼差しに鈴木は頷く。

「必ず探し出して叔父さんの前に土下座をせしやる」と鈴木は誓つた。

「ありがとう 賴りに出来るのはおまえだけだ」父親は宏茂の手を握り締め、また涙が溢れ出した。

宏茂は叔父の肩を優しくさすりながら、遺影の前に立つた。

（秋穂はまだ17歳で野獣たちの生贊になつた。これから楽しい人生が待つていたというのに・・・お兄ちゃん！と呼ぶ姿を見るには一度と叶わない。）

数珠を持つ手が、怒りのためにわなわなと震えだした。

隣で次々と組員たちが焼香を済ませた。

もつ一度父親に挨拶し、「入院している叔母さんにもようじへ会えて」と言つて立ち上がつた。

集まつていた親類縁者は怖いものでも見るようになつて彼を遠巻きにして、宏茂たちを侮蔑の目で見てくる。

宏茂は、そんな事は無視して斎場を後にした。

彼の後ろ姿から殺氣が沸き立つてゐるのみだった。

車に乗り込んだ宏茂は、組員に言つた。

「ガキどもを狩るぞ」

そしてタバコに火を点けた。

佐藤は1962年に大阪で韓国人の両親のもと金聖鐘キム・ソンジョンとして生まれた。

父親は貧しい移民だつたが、タクシーと不動産、パチンコで財産を築いた。

15才のとき、金聖鐘は、東京の名門私大、慶應義塾大学の高校に行かされ、そこで、政治と法律を学んだ。

この頃、整形手術で目を大きくして朝鮮人の風貌をかき消した。

聖鐘が17才のとき、父親はヤクザとのトラブルから香港で不審な死を遂げたのである。

聖鐘は、二人の兄弟と莫大な遺産を相続し、日本の国籍と佐藤城一という名前を得た。

佐藤を知っている人々は、奇妙な生い立ちが佐藤の個性を形作る上で何らかの役割を果たしたと確信している。

若くして突然父親を失つた亡命者の子供。

家族から離れ、名前とその顔さえ変えた。

そして、一生働くなくてすむほど裕福になつた反面、孤独と順応障害の可能性があるのは明らかだった。

佐藤城一は、異常性欲によつて快楽的殺人を犯すといつ性癖を持つようになる。

榛名を乗せたステーションワゴンは湘南の海岸線を走り、逗子マリーナのリゾートマンションの駐車場へと入つていった。

榛名が目を醒ますと、潮の香りが微かに感じられた。

下着一枚のままベッドの上に横たわり、まだ両手は後ろ手に結束バンドで縛られていた。

窓が半分ほど開けられ、レースのカーテンが海風で揺れている。

少し動かした頭に鈍痛が走った。

後ろ手にされた両手をお尻を潜らせ前に持つていく。

体の柔軟性には自信があった。

結束バンドの端を口に持つていき、糸切り歯で噛み切らうとするがうまくいかない。

うつ血した手首が限界を訴えている。

全神経を集中させ、バンドに歯を立てるのと同時に思いつきつ手首を広げる。

ビシッといつ音と共に結束バンドが弾け飛んだ。

榛名は片方づつ手首を揉みほぐしながら血行をとえた。

手の痺れが取れた頃、次の行動に移った。

窓からバルコニーに出て見る。

地上から5階以上あるようで、三浦半島が一望できた。

ここからの脱出は不可能であるのが判った。

その時、部屋のドアが突然開いた。

昨夜、自分を拉致した男たち一人が入ってきたようだつた。

ベッドの上にいるはずの榛名の姿を捜し右往左往している。

一人が慌てて出て行つた。

残る一人の男が、窓の方へ向かつてきた。

手にはミリタリーナイフが握られている。

ナイフがカーテンを分けながら現れた。

屈んでいた榛名は、そのナイフの手を驚掴みにして、外へ引き込んだ。

つんのめつてきた男がその拍子にナイフを落とし、びっくりした顔で榛名を見た。

男は慌ててナイフを拾おうとしたが、榛名の蹴りがまともに男の顔にヒットした。

両手で顔を覆つた男は、怒りの形相で拳を振り回して向かつてくる。

榛名は男の懷に入り込むと腕を取り腰を使って男を投げ飛ばした。

勢いあまつた男は、バルコニーの手摺を越え悲鳴を上げながら空中に放り出されていった。

榛名が下を覗くと落ちた男が真下のコンクリートの上に不自然な姿で横たわっている。

落ちていたナイフを手に取り、榛名は寝室へと戻った。

そして半開きのドアの裏に隠れ、隣の部屋の様子を窺う。

すぐに足音が聞こえてきた。

一人のようだ。

足音が止まり、銃口の先端がドアの端からゆっくりと現われた。

榛名は全体重を左肩にかけ思いつきりドアが閉まるように体当たりをした。

男の悲鳴が聞こえ、銃が暴発して床に落ちた。

きつと男の腕が折れたに違いない。

銃を拾い部屋の奥に立ち、閉まつたドアの向ひ側に照準を合わせる。

耳を澄ますと、怪我した男のあらい息遣いが聞こえる。

「先輩 どうしますか？」

「銃が女の手に渡つた以上もう危険は冒せない」

「逃げるぞー」と佐藤が言った。

そのとき救急車のサイレンが聞こえてきた。

犯行現場

榛名の携帯を持ち逃げまわっていた近藤達也は、携帯を車に残しその場を離れた。

間もなく警察車両数台が猛スピードで現われ急停車した。

近藤は野次馬に紛れ、その様子を見ている。

公園の駐車場にあるシルビアを囲み、次々と捜査員たちが降り立つ。遠巻きにしていたが、搭乗者がいないのを確認できたのかシルビアに近づき車内にスポットライトを当てはじめた。

近藤は現場を離れ、公園近くのコンビニに入りトイレから仲間へ電話を入れ迎えを頼んだ。

浅田課長は車内に入り中を見回した。

榛名のキャミソールとニースカートにブライジャーが破れたまま放置されている。

間もなく鑑識班が到着し、車内外の指紋の採取を始めた。

だが犯人につながる遺留品は見当たらず、榛名の居所も掴めなかつた。

バッグシートに結束バンドが数本、シートの下の床に落ちているのが発見された。

浅田はそれを1本拾い上げ見つめながら、榛名の無事を祈る。

その時、別働隊の松岡から連絡が入った。

シルビアが数分の間、停車していた場所を特定し駆けつけっていたのだ。

その場所は一戸建ての家で、借家であった。

松岡は大家を伴い家宅捜査をした、リビングの絨毯に比較的新しい血痕が発見されていた。

大家の話しでは1年前から若い男が借りていたらしい。

一人暮らしだったが、友人と思われる若い男達や女の子が頻繁に入りしていたという。

家賃は1年分を前払いしており、金回りはよさそうで金持ちのボンボン風だったという。

近所とのトラブルは特に無かつたらしい。

賃貸契約の保証人は兄弟がなっていた。

問い合わせたが、住所も名前も架空のものだった。

寝室にはビデオカメラが据え付けてあり、ベッドにも古い血痕が付着していた。

しかし住人や犯人を特定する物的証拠は何も発見されず、綺麗に持ち出されていいるようだつた。

奴らは、もうここには戻つてくることはないだらうと刑事の勘が働く。

松岡は、鑑識課に血痕のDNA鑑定を依頼した。

鈴木宏茂は、組事務所に戻るとさっそく街のチンピラ達を集めた。

「最近 街で女を拉致して好き放題しているガキどもがいるのを知つていいだろ?」

「誰かそいつらの情報を持つていなか?」と鈴木が聞いた。

一人の男が手を挙げた。

「噂なんですが、親の財産で随分派手に遊びまわってる奴がいるそです」

「内の若いもんが女を取られたと云つて切れました」

「そいつの話だと素人からキャバクラの女まで手当たり次第に食つているそうです」

「金を見せびらかせてから思い通りにするやうで、搾取する女は薬を使つて昏睡にしてから酷いことをするようです」

「還つてこない女もいると聞いています」とチンピラの男は言った。

「そいつがどこに住んでるか知つてるか?」鈴木が聞いた。

「分かりませんが、近藤という奴が仲間らしいです」

「近藤の居場所は掴めます」

「そりか後で調べて俺に報告してくれ」と鈴木は集まつたチノピアに小遣いを渡した。

「いいかお前らー。そういうの事が判つたら何でもいいから連絡をくれ

「「」」

榛名は、遠ざかる足音を追い部屋を出た。

二人の姿はもう見えなかつた。

そこには20畳ほどある広いリビングだった。

革張りの応接セットや大型液晶TVに大きな水槽もある。

水槽には色氣の悪いエンゼルフィッシュが沢山泳いでいる。

よく見ると白い骨のようなものが見えた。

指輪の嵌つた手の指の白骨化したものが沈んでいる。

もしかしたらピラニアなの?と榛名はそつと指をガラスに近づけた。

数十匹の水槽の中の魚が牙を剥き出しにして猛然と向かってきた。

佐藤は殺した女達をバラバラにして、このピラニアに面白半分に餌代わりにしていたのだろう。

自分の手首がこの中に入れられていたのかもしれないと思つと、榛名は背中に悪寒が走つた。

榛名は下着一枚の姿で外に出ることも出来ず、部屋の中を捜索することにした。

バスルームは意外と掃除が行き届き綺麗だったが、ここも微かに死臭のような匂いと不気味な雰囲気を感じる。

寝室に戻るとクローゼットを開けてみた。

佐藤のものと思われる男物のスーツやワイシャツが掛けあつた。

隅の奥に大きなダンボールが置いてある。

榛名は嫌な予感を感じつつも思い切って引き出した。

布テープを剥がして蓋を開けた。

「キヤーー！」と悲鳴が聞こえたような気がした。

中からは、かび臭い匂いと甘酸っぱい香水の香りが入り混じった臭気が上がってくる。

色とりどりの洋服や下着が詰まっている。

佐藤の犠牲となつた女の子たちの遺留品なのだろうか。

搜索願いを出している両親が、僅かな生存の望みを掛けている時にこの箱を見たらどう思う事か。

榛名は合掌した。

少し大きめだが、佐藤のワイシャツとスーツを榛名は着込んだ。

ベランダに出て下を覗くと、警察車両や救急車が到着し現場は騒然

としていた。

何人かの警察官がこちらを見上げている。

榛名は手を振った。

「課長 片桐が見つかりました！」 浅田の携帯に松岡から連絡がはいった。

「無事なのか？」 興奮した浅田が聞く。

「逗子マリーナのマンションの一室に監禁されていたようです、神奈川県警から今連絡がはいりました」

「片桐は軽症ですが、念のため病院で検査を受けています」 松岡が言つ。

「よし 大至急迎えに行つてくれ」と浅田が急かす。

「了解しました 現地の警察に連絡を取ります」と言つて松岡は電話を切つた。

片桐榛名は、上がつてきた警官を出迎え自分の素性を話した。

すぐに埼玉県警に問い合わせをした上で、警官たちは片桐を保護した。

「（一）は殺人犯の隠れ家なので現場を確保し鑑識班を呼んでください」と榛名は警察官に頼んだ。

「後は我々に任せて あなたは病院で診察を受けてください」と年配の警察官が言つ。

「大丈夫ですから・・・」と言つたが素直に従つた。

暴行は受けておらず、手首の擦過傷とクロロホルムで軽い炎症を顔に負つていただけであった。

病院を出てから神奈川県警へ移送された。

人一人が死んでいるので、関係者として事情聴取が待つていたのである。

埼玉県警の要請で浅田課長の同席も認められた。

県警の廊下で一人は対面した。

浅田は2日ぶりに会つた榛名の無事な姿を見て、安堵の溜息を漏らした。

「大丈夫か？ 片桐君」

「はい 課長！ もうこの通りいつでも任務につけます」と元気に榛名は言つ。

「おー おー！」

その時、警察庁から来た内務監査担当の係官が一人を部屋に入るように手招きした。

浅田課長は、今回の事件の発端となつた埼玉県下で起きている連續婦女拉致暴行事件のあらましを説明した。

そして片桐榛名に囮捜査の任務を課したこと伝えた。

その後のことは片桐榛名が言葉を引き継ぎ、拉致後の経緯を話し始めた。

拉致したのは若い男3人で、佐藤といつ名の主犯各の男がいる。

マンションはその佐藤という男の所有と思われ、自分もその部屋に連れて来られた。

覚醒した時、男の一人と揉みあいになり勢いあまって5階のベランダから投げ飛ばしてしまった。

さらに佐藤と別の男が現われたが、逆襲したために一人は現場から逃げて行つた。

彼らは銃を所持していた。

榛名は係官に2日間の出来事を簡潔に説明し、男を落とさせたのは不可抗力で過剰な防衛ではない事を主張した。

証拠品や浅田の証言も聞いた係官は、今回の事件は捜査上における正当防衛であったと認定した。

囮捜査はまだまだ日本の警察には馴染みが薄く、正攻法の捜査と相反するものと捉えられており、疑問視する警察庁幹部もいるのは事実であった。

以後慎重に捜査を進めるように注意を受け、一人は開放されたのである。

埼玉県警に戻る車中、榛名は浅田にクローゼットにあつたダンボールの中身の話をした。

いつたい何人の女性が犠牲なつたのか想像もつかない、本当に恐ろしい殺人鬼達だと榛名は浅田に訴えた。

浅田は、神奈川県警の協力も取り付けてあるので、現場検証の結果も隨時連絡がはいる事になつていてと言つた。

佐藤という男の居場所を突き止め、犯行を止めさせなければならぬい。

「強い意志で奴等を追い詰めていかなければならない」とハンドルを握りながら浅田は助手席の榛名に言つた。

榛名は頷いた。

その時、ヘッドライトに何かが突然浮かび上がつた。

浅田は急ブレーキを掛けがら、ハンドルを切る。

車は横転しながらガードレールを突き破り、止まつた。

数分後、榛名は意識を取り戻すと運転席の浅田を見た。

彼は即死だつた。

幸い榛名はエアバッグによつてダメージは少なかつたが、精神的ショックは大きかつた。

辺りからガソリンの匂いがし始める。

「脱出しなければ」と即座に思い、ドアの割れたウインドウから身を乗り出した。

誰かが自分の両手を掴み、引き出してくれている。

「ありがとう」や・・・と言ひかけた様な目に映つたのはあのピアスだった。

近藤は車から降りると、女のマンションに向かつた。

彼は新宿のNO・1ホストとしてまる一年目を迎えていた。

佐藤とは高校時代の先輩と後輩の関係で、よく六本木界隈のクラブで遊んでいた。

彼ら主催でマリファナパーティや乱交パーティを開いていたのだ。

近藤達也の父親は有名なベテラン俳優で、母親も女優だった。

何不自由ない子供時代を過ごしたが、両親の離婚がきっかけとなって生活が荒れ出したのである。

端正な顔立ちとセレブな服装で、いつも女の子達から熱い視線を浴びていた。

佐藤城二もそんな彼の影響で整形手術を決断したのである。

しかし時に見せる佐藤の粗暴な面を、近藤は恐ろしく感じていたが彼に逆らうことは出来なかつた。

いつの日からか佐藤の元で、彼の欲望の捌け口を捜す役目を担つていた。

一人の女を輪姦する時など、自分も佐藤のよつな異常な性質が芽生え始めているように思う事もあつた。

相手の苦しみや恥ずかしさ痛さを快楽と感じるのである。

サディスト的資質が近藤にもあったのだ。

今、付き合つてる女もドガ付くMだった。

二人のセックスは、かなりおぞましいものである。

ノーマルの人間ならば目を覆い嘔吐したくなる程のSMの饗宴である。

近藤も女も全身に刺青を入れている為、雄と雌のニシキ蛇がもつれ合つて交尾をしているようにも見える。

突然、ドアホーンを鳴らす訪問者が現れた。

時計を見ると深夜1時を回つている。

近藤は女に様子を見て来いと言つた。

ぶつぶつ言ひながら女は、バスローブを着込み寝室から出て行く。

近藤はタバコに火を点けた。

しばらくすると女が戻つて來た。

「遅いぞ いらー 誰だった?」

「・・・返事が無い。」

近藤が振り向くと、女の口を手で塞ぎながら後ろに男が立っていた。

「あんた 何者だ?」と言しながら慌てた近藤は吸っていたタバコを床に落とした。

男はそのタバコを拾つて、いきなり近藤の眉間に押し付ける。

「おい 何をするー」と言いながら手で払う近藤。

「俺か?地獄の使者だよ」と言った男の口角が上がる。

引き摺り出された榛名は、佐藤の手を振り解こうとした。

しかし銃のグリップで顔を殴られてしまい意識が朦朧となつた。

佐藤が銃口を向けているのが感じられた。

その時、男の後ろで横転していた車が火柱を上げ爆発した。

爆風を受けた佐藤は、3メートルほど跳ね飛ばされコンクリートの上に這いつぶばつた。

榛名はその間隙を縫い、立ち上がりふらつく体で逃げはじめる。

口の中を切り、顎の痛みと血の味が不快だった。

湾岸線に上がる、みなとみらいへり口の手前だった。

追い越し車線を通り過ぎようとした車を強引に停車させた。

後ろを振り返ると佐藤が追つて来ている。

「お願い 乗せてください 助けて!」と運転手に叫んだ。

中年の運転手は、榛名の肩越しに男が血相を変えて追い駆けてくる姿を見た。

「早く乗つて!」と運転手は言った。

榛名が乗ると同時にクラウンが急発進した。

銃声が後ろから木霊のよつに聞こえる。

（佐藤は諦めたのだろうか）と榛名はリアのガラス越しに男の姿を捲した。

佐藤は通りがかつたオートバイのライダーを銃で脅し、バイクを奪つているところだった。

跨るとフロントを浮かしながら後輪から黒煙を巻き上げて、このクラウンを追う体勢をとつていた。

「お嬢さん　彼氏と喧嘩でもしたの？」バック//ワードを見た運転手が聞いた。

「私は警官で、あいつは殺人犯です」と榛名は声を荒げた。

「普通は逆じゃないのかい」と一矢口とした運転手が言つ。

榛名は運転手を睨みつけた。

「遊びじゃないんです、携帯電話を貸してください

「分かった ほらー」と運転手は榛名に電話を渡した。

すぐに榛名は、神奈川県警の機動班に連絡し状況を説明した。

榛名の連絡を受けた機動捜査官は直ちに緊急配備を湾岸道路に敷い

た。

白バイの警官も数台現場に急行させていた。

「お願い全力で逃げてください スピード違反は問いませんから」と言つ。

運転手は事の重大さをようやく感じ取ったようだつた。

佐藤のオートバイがじわりじわりと間隔を詰め始めていた。

時速は130キロを超えている。

ヘルメットをしていない佐藤は、向かい風を避けるため身を低くしバイクと一体になつているようだつた。

川崎浮島を越えた辺りで遂にクラウンと並んでしまう。

この先は多摩川トンネルに入り羽田空港へと向かい、そこでは渋滞が待つてゐることだろうと榛名は思った。

「何とかしなければ」と榛名が呟いた。

鈴木宏茂は、近藤達也を連れ組事務所に戻った。

達也はおとなしく鈴木に従つた。

「お前達がどんなに女たちを好きにしようが俺には関係ないが、ドラム缶で生き埋めにした少女を憶えているか？」と鈴木が聞いた。

「憶えています、俺はあそこまでやる事はないと言つたんだ」と達也が言つた。

「仲間が悪いんだな」鈴木

「お前は何もしてないという訳だ」鈴木

「そう 僕はSEXが楽しければそれで満足なんです」近藤

「何も殺すことはない・・・」近藤

「だがお前達の強姦によつて女たちの人格を壊しているとは思わないのか？」鈴木

「何も知らない無垢な少女を異常なまでに責め立てることがどんなに精神的にも肉体的にも地獄の苦しみを『』えるか考えた事があるのか？」鈴木

「お前が殺したも同然だぞ」鈴木

「あの少女は、俺の妹だった」鈴木

「俺は赦さん！お前らにあの子と同じ苦しみを味あわせてやる」鈴木
「……『めんなさい 恥してください』と恐怖のあまり涙を流しながら達也が訴えた。

「主犯格の男がいるらしいがどんな男だ？」鈴木が聞いた。

「名前は佐藤城二と言います 高校の先輩です、親父が韓国人で日本で財産を作つて一年前に殺されらしいです」近藤

「佐藤は遺産を受け継ぎ金には不自由しませんが、性格が歪んでいて異常なほど女が好きで手当たり次第に犯しています」近藤

「ＳとＭが混在するような人格破綻者だと思います」近藤

「お前もそのよう見えれるが違つか？」鈴木が吐き捨てるよつと言つ。

「……そうかもしません」と俯いた近藤。

「何故 組織的に犯行を繰り返す」とになつたんだ？」鈴木が問つ。

「1年前のことでした、山中湖にある佐藤の別荘で異常な体験をしました」

「あの時は、男女6人ぐらいで麻薬をやりながら乱交するつもりで集まりました。かなり森の深い湖畔のログハウス風の別荘だったのを覚えています」近藤は記憶を辿るように汗を額に浮かべ話を進め

た。

「永遠とSEXを繰り返しながら、深夜の2時頃だったでしょうか。突然別荘の建物が揺れ出したんです、最初は地震かと思いました。しかし窓から昼間よりも明るい光が差し込んできたのです」

「薬による幻覚症状かもしませんが、何かが屋敷に侵入して来たのです。今でもはつきりとは思い出せませんが、何かに佐藤が連れ去られたのは憶えています。そして次々と仲間が居なくなりきつと私も連れて行かれたと思います・・・」と言つ近藤の顔が苦しみで歪み始めた。

「おい 大丈夫か?」鈴木が立ちあがうつとした。

「ええ ちょっと息が苦しくて、でも大丈夫です」

「何がお前達を襲つたんだ?」

「判りません ただ翌朝目覚めると全員が揃つていました

「ところが女が無惨な姿で死んでいたのです」

「陰部が抉られ、顔も陥没するくらい暴行を受けていました」

「男達は互いに疑心暗鬼にかかるぐらいに動搖しました」

「しかし佐藤城二だけが冷静で、死体の処理を我々に指示しました」

「あの女たちは今でも湖底に沈んでいると思います」

「その日以来、我々の行動が異常なまでにエスカレートしていったのは間違いありません」

「女と見れば襲わざにはいられなくなる」

「実は、僕は今でも時々深夜に光に襲われるのです。記憶が飛んでいて憶えていないのですが朝になると自分のベッドについて体のあちこちに痣ができるのです」

「眠れない日が続いています・・・」突然近藤が白目を剥き卒倒した。

その時、組の事務所が突然地響きをたてて揺れだした。

組員が慌てている。

停電したが事務所の中は眩しいほど明るくなつた。

揺れが収まると、近藤の座つていた椅子が空中に浮かび始めた。

近藤達也は放心状態となつており、訳の判らない言葉を発し始めた。

鈴木は唯、呆然とこの成り行きを見守るしかなかつた。

「神は生贊を求めている・・・罪人たちの死を持つて生贊とす・・・人類の淘汰がはじまるのだ・・・」と近藤の口からこの世のものとは思われない地の底から響き渡るような言葉だつた。

耳を覆いたくなるおぞましい声だつた。

そして近藤は、顔の位置はそのままで体だけが捩れるよじて回転を始める。

雑巾を絞るようにその体はひねり潰されて行った。

近藤は即死だった。

鈴木は悪夢を見ている時のように、その場に金縛り状態にあった。椅子が床に下りると同時に室内灯が点き、全てが元に戻ったのである。

ただ近藤達也の死体が悶絶の表情を浮かべ、椅子に座っているだけであった。

「悪魔が降りてきたか」と宏茂は呟いた。

不死身

榛名は運転手に車を止めるよしに訴えた。

急ブレーキを掛けた車は路肩に寄り急停車した。

すぐに車から降り、走り出した。

佐藤のバイクは不意をつかれて遙か前方に追い越して行き佐藤もまた急ブレーキを踏んだ。

バランスを崩したバイクは転倒し、佐藤は首都高の上り車線の道路 上を滑つていった。

相当のダメージを負つたはずだったが、佐藤はすぐつと立ち上がり 榛名の方へ戻り始めた。

ジー・パンが破れ上半身は裸同然になり血だらけだった。

銃を握りながら向かって来る。

運転手は車を発進し、佐藤と榛名の間に割つて入る形となつた。

佐藤は銃の狙いを定め発砲した。

数発が車のフロントガラスを砕き運転手の頭部に命中した。

クラウンは操舵を失つてトンネルの中に突っ込んで行く。

掘まるわけにはいかないと榛名は必死に逃げ始めた。

高速を逆走する一人の走る姿が数百メートルに渡つて続いた。

走行車両のクラクションが鳴り響いていた。

いつ轢かれてもおかしくない状況だった。

「鈴木さん大丈夫ですか？」組員が聞いた。

「一の男の死体を始末してくれ」と鈴木が言った。

組員は恐る恐る近藤の死体を椅子から一人掛かりで持ち上げ事務所から出て行つた。

報せを聞いた組長が現れた。

「ヒロ 何があつたんだ？」組員の話が信じられない様子だつた。

「組長 申し訳けありません 従妹が殺されたものですから犯人の一人を見つけ出しました」

「仲間の所在を聞き出そうとしたんですが、暴れ出して自ら首の骨を折つて死んだと思うんです」

「思うんですつて…どういうことだ？」と組長が訝しげに問う。

「分かりません 自分にはそう見えました」と遠くを見るように鈴木は言つた。

「あまり深入りはするなよ 警察に任せればいいんだ 分つたな」と言つて部屋を出て行つた。

鈴木は先ほどの光景が脳裏に焼きついて離れなかつた。

すぐに箱根の地図を部下に取り寄せさせた。

「組長には内緒だぞ」と言つて鈴木は、一人で箱根に向かつて車を走らせた。

中山湖、湖畔のログハウス風の建物といつ近藤の言葉を手掛かりに、鈴木は現地で手当たり次第に別荘を当たるうとを考えていた。

一体そこで何が起きたのか、いつたいあの現象は何なのか？

突き止めないではいられなかつた。

秋穂が犠牲となつたのは、あの男の言葉で云つと生贊にされたといふことなのか。

何の生贊なんだ。

よく外国の映画に出てくる黒魔術を駆使する殺人集団なのか。

鈴木の思いは、單なる暴行殺人事件から闇の大きな力が存在するオカルト的な展開になることを連想させた。

とにかくこの目で確かめようと、車のアクセルを踏んだ。

ダッシュボードには、愛用の357マグナムを忍ばせてある。

空を見上げると今にも雨が降りそうな暗雲が立ち込めていた。

鈴木はヘッドライトを点灯した。

榛名は髪を振り乱し必死に逃げていた。

100メートル程の間隔で佐藤が追い駆けている。

高速道路を逆走する一人の人間の影に、走行する車から危ないと云うようにクラクションが絶え間なく鳴らされている。

榛名の息が切れかかってきた。

体も度重なるダメージによつて思つように動かない。

体の節々から悲鳴が上がつている。

その時、前方に一台の黒いBMWがハザードを点けて停車していた。

榛名は近づき運転席を見た。

ハンドルを握つているのが女性に見えた。

「お願い 助けて！」と運転席の窓ガラスを叩く。

ウインドウを下げる運転手は榛名を見つめ、そして追つてくる佐藤の姿を確認した。

「早く乗つてー」と運転手は言つて助手席のドアのロックを解除する。

榛名は助手席に回りこみシートに座った。

心臓が喉から飛び出しそうで、体力が限界にきていたことが分った。
「あいつは銃を持っているの、早く車を出して！」佐藤の姿を見ながら苦しそうに叫んだ。

「早くー」と言いながら運転手の方を見た。

「俺も持っているぜ！」と言った運転手は銃を榛名に向けた。

その時、追いついて来た佐藤がバックシートに飛び込んで来た。

「『』苦労さん 飛んで火に入る何とかだな！」と佐藤と運転手は笑つた。

運転手は女装した佐藤の仲間だったのだ。

「手を焼かせやがつて」

榛名は後ろから佐藤に側頭部を殴られその場で意識を失った。

「山中湖へ行つてくれ」佐藤は血だらけの体をタオルで拭きながら運転手に指示した。

「OK ボス」ハザードを消したBMWは滑るように発進した。

間もなく後方から十数台の警察車両が追い越して行く。

一台のクラウンがトンネルの手前で大破していたのだ。

そして非常線が張られている中を、交通機動隊の誘導で佐藤たちは慎重にゆっくりと通過していく。

振り返った佐藤城二の顔は、赤色回転灯の光に照らされ口元に笑みがこぼれていた。

鈴木は御殿場インターで降り、国道138号線を山中湖に向け車を走らせた。

明神前で二叉路を729号線に入った。

そして別荘を一軒一軒見て廻る。

湖に面したログハウス風の建物を重点にベンツを停めながら様子を窺つた。

近藤の言つていた佐藤の別荘とは合致しないような気がする。

きっと別荘の集まつている場所ではなく、孤立した建物であるひとつと考えた。

数件目でそれらしき別荘が現れた。

ベンツをやや離れた国道脇のパークィングスペースに停車させ歩く。

かなり大きく国道から外れ湖の方へせり出す形の木造建築だ。

木々に囲まれ外界から遮断されている佇まいは、まさに隠れ家的様相を呈していた。

このロケーションだつたらヤクをやりながら乱痴氣騒ぎをしても周辺の住民から咎められないと鈴木は思つ。

雨がパラパラと降ってきた。

風も出てきたようだ。

別荘内は明かりが無く人の気配も全くしない、住人は不在のようだつた。

鈴木はウインドブレーカーの襟を立て、建物に近づいていった。

腰のベルトにはパインソング57マグナムを挿していた。

窓から薄暗い室内を覗くが、家具が整然と並んでいるだけで生活臭さは感じない。

しばらく使われていないのだろう。

湖に面したウッドテックへ回り込んでみた。

モーター ボートが繋がれていて、エンジンは外されてはいない。

湖面のさざなみがやや荒ればじめて来ているようだった。

嵐の前兆のように湿気った生暖かい風が鈴木の体を舐めていく。

その時、車が砂利を噛み乱暴に停車する音が聞こえた。

数人の男の声がする。

鈴木は身を隠し様子を窺いながら近づいた。

そこにはBMWが止まっていた。

男とオカマが一人の女を抱きかかえ別荘の中に入ろうとしている。

女は氣を失っているようだつた。

奴らだと直感的に鈴木は感じた。

腰のベルトからマグナムを抜き出した。

鉛色の銃身が鈍い光沢を放つ。

鈴木はマグナムの撃鉄を起こし足を踏み出した。

脱出

佐藤がドアの鍵を開け、男達は榛名を抱えながら建物の中に入つて行つた。

照明のスイッチを押し室内が明るくなる。

リビングにあるソファーに榛名を横たえた。

室内はシックなデザインで統一されている。

ソファーはモノトーンの布張りのしつかりしたものだつた。

キッチンに行つた佐藤が2本の缶ビールを持って戻つてきた。

一つを仲間に放つた。

ブルリングを外し泡をこぼしながら一気に飲み干す。

「先輩　ここに来るのは久しぶりですね」

「ああ　そうだな　あの時以来かもしけん」佐藤は思い出すよつて呟いた。

「1年は経ちますよ」

「あの女達の死体はまだ発見されていないみたいだし」

「おこ　そのことは黙つていろ」と言しながら佐藤は榛名の方を見

た。

榛名はまだ意識を戻してはいない。

「そういえば近藤と連絡は取れたのか？」

「それが携帯にも出ないし、自宅にも帰っていないよつです」

「あいつの女に当たつてみたのか」

「AV女優の刺青の女と一緒にひを見た事があるんですが、その女も行方不明のようです」

「やうが」と言つたきつしばらへ佐藤は考え込む。

「どうやら警察以外に我々を捜している奴がいるひじこ」と佐藤は呟いた。

「近藤が掘まつたとするところの場所もいづれ割れるだひつ」

「先輩　この女はどうするつもつですか？」

「その女は保険だ」と佐藤が言つた。

「それはそつと、上原よ　いい加減その女装をやめたうひつだ、早く着替えろ」

「意外と気に入つてゐんですよ」と上原はスカートを捲り上げておどけむ。

上原は、外の車に着替えを取りに行つた。

鈴木は突然出て来たオカマ野郎と鉢合わせになつた。

上原は一瞬こいつは誰だという顔をして固まつたが、すぐに格闘の体勢を取つた。

空かさず前蹴りで鈴木の銃を蹴り飛ばし、暴発した銃声が夜の湖畔に轟く。

鈴木は上原の正拳突きをかわしながら、右フックをヒットさせた。

ぐらつく上原にさらにおい討ちをかけ拳を叩き込む。

実戦の喧嘩ではヤクザに勝てる者はいない。

「なめんなこらー」叫びながら止めを射そうと失神寸前の上原に馬乗りになつた。

その時、後頭部をしたたかに強打され、唸りながら鈴木は振り返つた。

見上げた男の顔は、ピアスだらけだった。

銃を構えて今にも発砲しそうだった。

だんだん視界がぼけて、遂に意識が無くなる。

榛名は銃声で意識を取り戻していた。

気が付くと佐藤城一が建物から外へ出て行くところだった。

全身が痛かつたが、無理をして体を起こす。

悲鳴をあげたが、ぐつと堪えた。

頭が割れるように痛い。

こめかみから血が滲んでいる。

あいつが戻る前に、ここから逃げなくてはならない。

榛名は部屋を見渡した。

窓の外のウッドデッキと湖が見えた。

よろめきながら窓の側までたどり着く。

そっと窓を開けたが、強風がカーテンを巻き上げて榛名を押し戻した。

やつとの戦いで外に這い出し、ボートに潜り込んだ。

エンジンのセルを回してみる。

始動した。

牽引ロープを外し、波高い山中湖の沖合に向かつて舵を取った。

間もなく後方から銃声が響いた。

佐藤がデッキから銃を発砲していたのだ。

揺れるボートのために的が定まらず当たらない、榛名は脱出に成功したと思った。

しかし・・・

アクシデント

突然、榛名の乗ったボートが立ち往生した。

エンジンは吹いているのだが、前進しないのである。

そのうちにエンジンがオーバーヒートしたらしく黒煙を上げ始めた。

そして遂にエンジン停止になる。

佐藤の別荘から1キロほど離れた沖合いだつた。

湖の中心で榛名は、風雨が強まるなか完全に進退が極まった状態になる。

夕闇が迫ってきている。

対岸は、はるか遠くに見え、微かに家の灯りがちらついているのが見える。

榛名は、スクリューの状態を調べるために湖面を覗き込む。

ロープのようなものが絡み付いているのが分った。

榛名はそのロープを解くために思い切って水面に飛び込んだ。

息を大きく吸い込み、水中に潜り込む。

スクリューに纏わりつく腐りかけたナイロンロープを必死に解き始

める。

何回も息を継ぎながら、体力の続く限り水中に戻る。

よつやくあと一息のところまできていた。

その時、湖底から黒い大きな物体が榛名をめがけて浮き上がり始めたのだ。

榛名は慌ててボートに躍り上がった。

ぶつかる寸前に黒い物体が海面に飛び出した。

榛名は息を荒げながらボートの縁に手を掛けてそれを凝視した。

麻布のよつな袋だった。

黒く変色していたが、所々に白い突起物が出ている。

よく見るとそれは骨であることが分った。

手の骨や足の骨がはみ出している。

波に洗われると髪の毛が広がるよつに漂うのも見えた。

女たちの死体が入った麻袋が、榛名の乗ったボートに偶然引っかかったのである。

きっと錐にしたもののが外れて上がってきたのだよつ。

榛名のボートにすがりつゝよつてその死体は浮き上がってきたのか
もしれない。

榛名は、その袋が再度沈まないよう逆にボートに括りつけた。

佐藤の犠牲者であることに間違いないと確信した榛名は、殺人の証拠となるこの死体の保全を考えたのだ。

辺りはすっかり日が暮れて漆黒の闇と化していた。

榛名はようやく作業を終え、汚れた手を湖水で洗おうと手を水面に入れ水を掬おうとした瞬間、水中から男の手が現れ湖に引き摺りこまれた。

手足をばたつかせようやく水面に顔を出すと、後ろから羽交い絞めにされた。

「しぶとい女だな 全く！」佐藤の声だった。

リストート

鈴木が意識を取り戻すと辺りを見渡した。

別荘の中には、木製の椅子に荒縄で括つつけられている。どう足搔いてもびくともしないぐらうに縛り付けられていた。

後頭部が焼けるように痛かった。

田の前のソファーには、女装の男が横たわっている。

顔を腫らし黙をかいて寝ているようだ。

異常な鼾のかき方で、きっと脳内で出血しているのだろう。

佐藤と女の姿が見えないのはどうわけか不思議だった。

なんとかこの状況を打破しなければならないと鈴木は思案した。

キッチンに行けば何かあるかもしれないと思い。

体を揺すりながら、少しづつ椅子を動かして行く。

幸い床がフローリングで滑りやすかった。

15分経つたのうか、ようやくキッチンの入り口まで辿りついた。

シンクの上には、包丁や料理用の道具が置いてある。

100円ライターを見つけた。

なんとか口をライターまで寄せて咥える。

それを足元に落とした。

そして体勢を変えながら、鈴木は思い切って横倒しになる。

肩をしたたかに打ち、悪態をついた。

「まざい！」と息を呑んだがどこからも佐藤は現れない。

後ろ手に結ばれている両手を落ちたライターの位置まで動かす。

勘がたよりだつた。

うまい具合に指にライターが触れた。

指を器用に動かし、ライターを掴む事が出来た。

鈴木は一呼吸入れ、息を整えこれからが肝心と慎重に手首を動かす。

手の中にあるライターを縛つている荒縄に向けて着火しなければならないからだ。

火が点いたとしてもある程度燃えなければ自力で切ることは不可能だ。

やけど覚悟で鈴木はライターを点火した。

数回繰り返し、ようやくな臭い匂いが漂い始めた。

手首が熱くなつてきている。

火の粉が舞い始めた。

まだだ！我慢だと自分に言い聞かせながら、鈴木はタイミングを待つた。

めらめらと皮膚が焼け爛れる匂いと痛さが背中からこみ上げてくる。

服は雨で濡れているせいが引火はしないようだつた。

よし！鈴木は思い切つて手に力を籠めた。

予想通り縄は焼き切れ、手が自由となつた。

後は全身を巻き上げている縄を解きに掛かる。

そして立ち上がり、まだ燃えている縄を踏みつけた。

蛇口から水を流して手首に当てながら冷やす。

冷蔵庫のフリーザーの氷も使う。

真つ赤に焼け爛れた手の甲に氷を入れたタオルを巻き、鈴木はリビングに戻つた。

そしてベンツまで戻り、ダッシュボードの中から予備の銃と弾倉数個を取り出した。

ベレッタの弾倉を確認し、別荘を振り返った鈴木は決着をつけてやると呟いた。

変死体

松岡警部補は、浅田の事故死の連絡を受け現場に急行した。

目撃者の話を総合すると、車が急に蛇行を始め国道際のガードレールに追突し横倒しなった。

同乗していた片桐榛名が自力で脱出したらしいが、若い男に襲われたらしい。

間もなく車は炎上し、ガソリンに引火したため爆発を起こした。

司法解剖によると浅田は器官に煤が付着しておらず事故当時即死状態だったことが分った。

その後、榛名は男に追われながらも必死に逃げたらしく川崎付近で湾岸道を逆走している姿が何人ものドライバーに目撃されていた。

その時も半裸の若い男に追い駆けられていたらしい。

その後の消息は不明である。

松岡は、別件で近藤達也の所在を洗っていた。

シルビアを乗り回していたのが近藤であることが指紋の照合で判つたからである。

最近付き合っていた女を捜しだし、1時間ほど前に身柄を押されていた。

署に戻った松岡は、尋問室で女と対峙していた。

「近藤の居場所はどこかわかるか？」

「・・・」

「どうした？」

「あいつが連続婦人暴行犯の一昧である証拠は掴んでいる」

「間もなく指名手配が掛けられるはずだ」

「隠すとお前も同罪になるだ」

「・・・私は何も関係ありませんから」

「一人の婦人警官の命が掛かっているんだ 頼むから捜査に協力してほしい」

「・・・実は」

「2日前の夜中に私のマンションに彼は居たんだけど、夜中に尋ねて来た男に連れて行かれてそれっきり連絡が無いんです」

「あいつとあの男はヤクザよ、何も言つてなかつたけどあいつと達也を殺す気だと思つ」

「危険な匂いがしたわ」

「どこの組の者か 分らぬいか？」

「分らないけどチンピラじゃないわ きっと幹部クラスだと思つ」

女を帰した後、近藤が河川敷で遺体で発見されたと連絡が入つた。

頸椎損傷が致命症だつた。

埼玉医科大学の検死解剖に回された。

松岡が到着すると解剖の真つ最中で、遺体の体中に刺青が彫られて
いた。

検死の結果、殆どの内臓が破裂するほどの体の捩れ方だつた。

首は何回転もしているようで、まるで雑巾を絞つた様だつた。

「一体どうしたらこんなになるのか初めて見る変死体だ」と執刀医
が言つた。

間もなく遺族が駆けつけ、遺体を引き取つていつた。

犯人につながる物的証拠は何も出なかつた。

そんな時、部下から情報が入つた。

「警部補 コンクリート詰めで発見された少女の親類に住吉会系の
幹部の人間がいることが分りました。そしてその幹部の男の命令で

犯人達の情報を集めていたそうですが

「そいつの名前は割れたのか」

「はい 鈴木宏茂といつそりで組織の幹部で二十・二だそうです」

「よし今からそいつの組事務所へ乗り込むぞ」

ターゲット

中里六代目なかざと ろくだいめは埼玉県越谷市に本拠を置く博徒系暴力団で、指定暴力団・住吉会の2次団体。正式名称は住吉一家中里六代目。勢力範囲は千葉県、埼玉県、茨城県。

越谷に向かう車中で、マル暴の担当刑事から説明を受けた。

特捜課の刑事と暴力団担当の刑事は、同じ署内にいながらほぼ接点が無く、合同で捜査に当たる事は異例中の異例であった。

鋭い眼差しのマル暴担当の刑事は、名前を伊達いだと云いつたが角がりの頭にサングラスという暴力団顔負けの強面きょうめんだった。

お互おながいに刑事になつて10年以上のベテランだった。

到着すると伊達を先頭に組事務所へと入つて行つた。

伊達の顔を見た組員は、おとなしく出迎える。

応接室に通された後、間もなく組長が現れ二人の顔を交互に見る。

「伊達さん 久しぶりやな 相変わらず元気そうで」とタバコを取り出しながら言つ。

「6代目、忙しいんだ 聞きたいことがある」と伊達が組長の言葉を遮つた。

松岡の方を見た。

「埼玉県警殺人課の松岡と云う者だ」松岡が口火を切った。

「昨夜、元荒川沿いの河川敷で近藤達也という男の死体が発見された」松岡は組長の目を探るように見た。

「それは可哀相なことだな」と煙を吐く。

伊達が口を挟む、「若頭の鈴木はどこにいるんだ？ 最近、奴の指示でチンピラが嗅ぎまわっているといつ噂を聞いたんだが」

「殺された従妹の少女の犯人を捜していたらしい 知つてたか？」と伊達が言つ。

「ああ その件は鈴木から聞いていた。惨い殺され方だつたらしい」「我々だつて余程じやなきや、あそこまではしないからね」

「どうだか」伊達が皮肉たっぷりに言つた。

松岡が口を開く「鈴木は近藤を捕まえた、そしてどこかで尋問したことだらう、もしかしたら拷問の末に殺したのかもしけない」

「・・・」組長が難しい顔をした。

「どうだ このままだとお宅の組はここでシノギが出来なくなることになつてもいいのかい 組長さんよ？」と伊達が凄みを利かせて言つ。

「分つた 話す」と觀念したように組長はタバコの火を消す。

「3日前、鈴木は一人の若い男を事務所に連れて来ていた」

「仲間の居所を聞くためらしい、特に頭の男の所在が知りたかったらしい」

「犯人達を女の子の墓前に膝まづかせる事を従妹の父親に約束した」という話だ」

「近藤という男は、何かを喋つてから自ら命を絶つたと私は鈴木から聞いた」

「その後は私は一切タッチしない」

「今、鈴木がどこにいるかは、組員が知ってるかもしけん」

組長は組員数人を呼び、刑事に協力すように指示した。

一人が話し始めた、「兄貴は昨日の昼過ぎに車で、箱根に出かけました」

「山中湖周辺の地図を見てましたから」

「その辺りの別荘を捜していると思います」

「奴らのアジトらしいんです」

「それから、実は昨夜から兄貴の携帯に連絡が取れなくなつてます」と言いながら組長の顔を恐々見た。

「何故、俺に黙つて行かせたんだ?」と火の点いたタバコを組員に向けて投げた。

「すみません!」と深々と頭を下げる。

松岡が口を挟む、「とにかく鈴木を捜し出す事が先決だ」

「山中湖に間違いないな?」と組員を睨む。

「はい 私も男の話を聞いていました」と若い組員が言つ。

「よし 分つた 親分ちょっととこの若い衆を私に貸してくれないか？」と松岡が伊達と組長を見て言つ。

「それは勿論構わん 内の組の問題でもあるんだし協力するのは当たり前だ」

「伊達さん 捜査に協力するから何卒穩便に済ませてくれないか」と組長は伊達に訴えた。

「俺はいいんだが、松岡さん次第だな」と松岡を見た。

「婦人警官が一人行方不明になつていて、救出が第一の目的だ」「場合によつては力を借りる時があるかもしれない」

それを聞いた組長は、現地で待機するようひと組員達に指示した。

伊達も同行したいと申し出た。

松岡達は、直ぐに組員一人を連れ、車に乗り込み箱根を目指した。

松岡は捜査本部に連絡し応援を要請した。

湖上の風は激しさを増し、雨とあいまつて春の嵐の様相を呈してきました。

佐藤は榛名をボートに乱暴に乗せ、ロープで縛り上げた。

そしてエンジンを操作し再始動させた。

エンジンは完全にオーバーフローする前に安全装置が働き、再始動が可能だったのだ。

波を切りながらボートは一路、別荘へと引き返し始める。

雨や湖水を浴びながら榛名はずぶ濡れとなり、寒さのあまり震えが止まらない。

恐怖心と絶望感で、榛名の頼る術は神に祈る事しかなかつた。

10分ほどで別荘の船着場へ到着した。

黒い麻袋も付いたままボートは佐藤の手によって牽留された。

榛名を抱え上げた佐藤は、別荘に入つて行く。

細い体の割に異常な腕力を持つている。

かなりの疲労が蓄積されたであろうが、佐藤の体力はあり余るようだった。

榛名は佐藤の人間技では考えられないタフさに驚いた。

デッキからリビングの出入り口を通り中に入った。

ソファーには、先ほどの女装の男が鼾を搔きながら横たわっている。

その背後には、椅子に座った見知らぬ男がいた。

荒縄で縛られて氣を失っているようだった。

榛名を床に放り投げた佐藤は、肩を回し頭を左右に振った。

首の後ろには田のような刺青が施してある。

髪の毛の水しづきが飛び散る。

佐藤はテーブルの上の缶ビールを手に取った。

空だった。

缶を握り潰しながら、新しいビールを冷蔵庫へ取りに行くためキッキンへ向かった。

突然、椅子に縛られた男が顔を上げ、脱ぐように縄を体から外した。

手には銃が握られている。

榛名の側により、彼女の縄を解こうとする。

「味方だ 大丈夫か？」と鈴木は榛名に囁く。

濡れているので繩が締まっている。

解けた瞬間、キッチンから佐藤の怒号が聞こえた。

「いったい誰だ 何をしたんだ？」

飛び出してきた佐藤は手に包丁を握り締めている。

榛名を抱き起こした鈴木は、「逃げろ！」と叫びドアを指した。

包丁を振りかざした佐藤が飛びかかるうとした時、鈴木はベレッタの銃口を佐藤に向けた。

銃声が鳴り響いた。

包丁が弾き飛ばされ空中を舞う。

佐藤は右手を抑え「痛え！」と唸りながら蹲る。

包丁はドアを開け、ふらつきながら出て行つた。

「待て！」佐藤がドアを開けようとする榛名の方を見て叫んだ。

鈴木はベレッタを佐藤の眉間に近づけ、「余計な事を言つな！自分の事でも心配してり」とドスを効かせて吐き捨てるよつて三つ。

指の血を口に含んだ佐藤は、不敵な笑いを顔に浮かべた。

「・・・」（気が狂つたか）と鈴木は思つ。

突然、別荘が停電となり部屋が真っ暗となつた。

家具が振動を始め、そして別荘全体が揺れ始めた。

近藤が死んだ時と同じだつた。

サイドボードが倒れ、100インチの液晶TVが横倒しなつた。

窓ガラスが粉々に割れ飛び散る。

鈴木は安全な壁際により、佐藤から田を離さないよう銃で狙いをつけていた。

「迎えが来たぞ！」と近藤は両手を上に上げながら高笑いを始めた。

その時、外から榛名の叫び声が上がつた。

激しい揺れの中、窓から異常なまでの明るい光が差し込んでくる。

室内の埃がライトアップされ煙のようになつた。

その時、佐藤が徐々に空中に浮き上がつて行く。

鈴木は彼を狙つてベレッタのトリッガーを絞つた。

天変地異

稻光が閃光を放ち、ゲリラ豪雨が静岡県北部を襲っていた。

松岡たちを乗せた警察車輛は山中湖に到着した。

湖岸周辺を廻りながら、鈴木の乗つていたベンツを捜す。

黒のベンツで金色のモールドが際立ちすぐに目立つ車だった。

「松岡さん あの雲変じやないですか？」と組員の男が言つた。

「積乱雲が低く垂れ込め、雲の合間から月光が射しこんでいるんじやないか」と伊達が言つ。

円盤状の雲の真下には一軒の別荘の屋根が木々の合間から見えた。

その円盤型の雲の底部から光線が地上に向けて放たれている。

松岡はアクセルを踏み込み現地を目指した。

途中で鈴木のベンツが路肩に寄せられているのを発見した。

間違いなくあの別荘が怪しいと松岡も伊達も感じた。

あと100メートルのところで突然、覆面パトカーのヘッドライトが消え車内が暗くなる、アクセルを踏み込んでも加速せず、エンジンブレーキが効き始め遂に車は停止した。

「不思議だ」と松岡は咳きながら何度もスターターを回すが反応しない。

豪雨の中、3人は車を降り徒步で別荘を目指すことになった。

アスファルトを叩く雨の音が激しい。

3人は走り始めた。

道路の街燈も消えていた。

漆黒の闇の中を、数秒のインターバルで閃光を放つ稻光を頼りに目的地へ向かう。

その時、前方で女の叫び声が闇を切り裂いた。

「榛名！」と松岡は叫んだ。

鈴木はベレッタのトリッガーを絞つた。

スライドは後退したが撃発しない。

弾丸がジャムったのかと思い、手で排莢させてからもう一度弾倉を装着した。

佐藤は天井に頭が届くほど浮き上がっている。

ソファーがグルグルと佐藤の周りを回転している。

まるで遊園地のような騒々しさだった。

今度は弾丸を発射出来たが、ソファーに遮られ佐藤には当たらなかった。

女装した男の体が空中を舞い、鈴木へ頭から体当たりをしてくる。

（一体、何に操られているんだ）と思しながら鈴木は身を屈めて辛うじてかわす。

灰皿やゴルフクラブ等が凶器となり、鈴木を襲うかのように巻きのごとく押し寄せた。

身の危険を感じた鈴木は玄関から脱出するためドアノブに手を掛けた瞬間、焼き餃を握ったような激痛が手に走る。

慌てて離すが、左手の手の平から煙が出ていた。

焦げた嫌な匂いが鼻を突く。

キレた鈴木は、ベレッタをドアノブに向け連射した。

金属が破損して弾け飛び、同時に右足を蹴りこんだ。

グシャという音と共にドアが外側に放たれる。

鈴木は転がり出すようにして、別荘の正面階段を落ちて行った。

体を掠めるようにゴルフクラブや包丁も後を追いつき飛び出していく。

体勢を取り直すと目の前で榛名が、黒い人間のような影に襲われていた。

榛名よりもかなり小さいが、大勢で群がるように榛名に掴みかかる。

噛み付くのもいるようだ、榛名は必死で振り解こうとしている。

まるで子供の影のような物体が蟻のように押し寄せる。

鈴木は呆然と見ていたが、榛名が救いを求める目が彼を捉えた。

「助けて！」

我に返った鈴木は、ベレッタを掃射した。

黒い集団に当たつた手応えはあつたが、黒い軍団は2つに分断して、鈴木を田指し押し寄せて来る。

素早くベレッタの弾倉を交換し、飛び掛かつてくる物は容赦なく銃弾を浴びせ、足首を掴もつとする物は蹴り飛ばした。

しかし撃を出すようにその物体は、後から後から向かつてくる。

鈴木は孤立して戦つても、いずれこいつらに飲み込まれると思い榛名の側まで走つた。

榛名に取り付く奴らをベレッタで叩き落として、二人は背中を向け合ひ臨戦体勢をとる。

一度退いた黒い集団は、彼ら一人を取り囲みそして徐々に間隔を狭めてくる。

いくつも田の焦点を合わせようとしても、どうしても影のようになじか映らない。

口はあるが田や鼻がぼやけ、のつぺつとしている。

手足はあるように見えるが、定かでは無い。

歩いているように見えるが、いや空中に浮いているようだった。

まるで悪夢を見ているようだつた。

耳元で蚊が飛んでいるような羽音のよつなものが耳について離れないと。

（奴らの声なのか？）

「君は大丈夫か？」と鈴木は背中越しに叫んだ。

「！」いつも一体何なの？」と榛名も叫ぶ。

「いくら撃つても奴等には一時的にしがダメージが無いようだ」

「化物！それとも宇宙人？」

「化物？それはあいつだ！」と言いながら鈴木は別荘の屋根の上を見上げた。

まるで真上の雲の中に吸い込まれていくかのように、屋根をすり抜けた佐藤が気を失い上空に浮かび上がっていた。

黒い物体が鈴木の腕に噛み付く、肉を食いつぶされたようだった。

腕に激痛が走り、銃を落としてしまった。

榛名も背中に乗りかかられ肩を噛まれたようだ。

彼女の絶叫が聞こえた。

その時、道路の方から男の声が聞こえた。

「榛名！」

そして三人の男達が現れた。

3人の男たちは、銃を乱射しながら駆けつけて来た。

「てめえら どきやがれ！」組員の男が叫びながら黒い物体に躍りかかっていく。

「兄貴！俺です 横原です」

落としたベレッタを拾った鈴木は、信じられないという顔で横原を見た。

松岡は榛名に取り付く黒い物体を剥がしながら銃を撃ち続けた。

伊達はゴルフクラブを手に持ち、怒号を発しながら振り回している。

黒い軍団は、分断されたため勢いが無くなってきていた。

「助かったぞ！横原 いい時に来てくれた」と鈴木は肩で息をしながら言う。

「ここにつけは何ですか？」

「俺にも判らん ただこの世の物では無いことは確かだ」

至近距離で撃たれた物体は、黒い液体を噴出しながら霧のよくなつて消滅していく。

耳を劈く羽音のような音が、絶叫のよにも聞こえる。

松岡は榛名を抱きかかえながら、迫る物体を撃っていた。

「松岡さん すみません こんな事になつて」と涙目になつている。「今はいい とにかくここから脱出する事だけ考えるんだ」と松岡は榛名を見た。

顔面蒼白でずぶ濡れになつた彼女の姿が哀れでならなかつた。

まだ数十体の黒い捕食物体が彼らの隙を窺つている。

その時、上空に雷のような轟音が鳴り響いた。

全員が一斉に空を見上げる。

富士山の方角から低空で迫つてくる三角形をした機体が2機現れた。

一度真上を通過し、旋回してまた向かつて来た。

F-117ステルス戦闘機だつた。

別荘の上空の雲が突然、揺れ出し光が急に弱まつたように見えた。

佐藤の体はもう少しで雲に隠れようとしていたが、突然邪魔が入つたため不安定に揺れながら屋根に落下した。

そして転がりながら屋根伝いに、5人のいる玄関前に不自然な体勢で地面に叩きつけられる。

氣絶していた佐藤は、その衝撃で唸りをあげながら田を開けた。

田に飛び込んできたのは、黒い物体だった。

「ギャーー！」佐藤は叫んだが時すでに遅く、黒い捕食体の餌食となつてしまひ。

腕も足も折れているようで、身を庇うことも匂ならず佐藤は全身に纏わりつかれ、全身を食い千切られていく。

ピラニアに襲われている水牛のようだった。

全ての黒の捕食体は、佐藤の体に群がつた。

「た・す・け・て・・・・ウグ・・・・」喉を食い千切られたようだ。

石炭の塊のように盛り上がり波打つて、佐藤はひきつけを起こして痙攣しているようだった。

それが佐藤の最後だった。

F-117ステルス戦闘機は、海上保安庁の未確認飛行物体の連絡を受けた防衛省が米軍へ連絡し派遣要請されたものだった。

光る雲は急速に上昇し始めると、雨や風が止み稲光も収まつた。

ステルスはその雲を追尾し、国際法上の警告を発した後ミサイルを発射した。

3発目でようやく命中したのか、雲の上遙か上空で爆発音が轟いた。

青木ヶ原の樹海の中に墜落していく円盤状の飛行物体が確認された。満月の月光が雲の切れ目から山中湖畔をスポットライトのように照らし始めた。

風も雨も收まり、湖面の波も嘘のように匂いできていた。

3人は呆気に取られていたが、すぐに彼らは目を佐藤に戻した。

そこには白骨と衣類だけしか残つていなかつた。

「無惨な屍骸だが、奴に似合う死に様かもしれない」と松岡が呟いた。

秋穂の父親に見せるために松岡から借りた携帯でシャッターを切る鈴木だつた。

間もなく陸上自衛隊特殊部隊と神奈川県警の警察車輛が到着した。

松岡が付き添い、救急車で榛名と鈴木は病院に運ばれた。

伊達と組員の男は、いつのまにか消えた黒い物体がまだいなかと辺りを捜しまわる。

その後ボートからは3人の少女の変死体が発見された。

だが3人は家族から捜索願いが出されていなかつた。

家宅捜査の結果、別荘から麻薬や死んだ少女達数十人と佐藤の写つ

たビデオが押収された。

20件以上の佐藤城一の犯行が明らかになり、仲間も数名逮捕される。

その後佐藤は、被疑者死亡で埼玉県警察本部に書類送検された。

佐藤城一の遺体は、検視後行方不明となり今でも見つかっていない。

1年後、檍名は松岡と結婚し、警察を円満退職した。

伊達はマル暴から未解決事件を扱う特務課へ移動願いを出し、受理されていた。

鈴木は暴力団から足を洗い、檍原と一緒に出家し京都の寺に住んでいる。

10年後、インターネットの裏オーケーションに佐藤城一の遺骨が出品され、1億円という値がついたという噂が若者の間で都市伝説となっていた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8397v/>

女子高生コンクリート詰め殺人事件（禁戒の書）

2011年11月11日02時09分発行